臨床ノート特別企画

第36回総会シンポジウム「顔面外傷」(会長: 黒住静之 広島大学教授)

とくに耳鼻咽喉科医に必要な基本的知識について

おきのよういち
萩野洋一*

顔面外傷はその部位が人の目につくところに生ずる損傷であるが故に肉体的並びに精神的苦痛は著しく、且つまた顔面には各種の重要な機能をもつ器官が多く集っているだけに外傷による機能的障害が患者の日常生活に与える影響は大きい。従って各種の訴えをもって耳鼻科医を訪れる顔面外傷患者の数も少なくない。

そこで耳鼻咽喉学における研究並びに臨床における重要な分野の一つとして耳鼻科医が当然これと取り組まねばならぬ課題であると考える。

しかるに最近この分野に関連する耳鼻科医の関心は少なく、積極的にこの種の問題をとりあげている学会発表や学術論文をみることができない。

このことは日常の臨床における耳鼻科医の態度にもうかがい知ることができる。私共の臨床に紹介されて来る各種の程度の顔面外傷患者から病歴を聴取してみると、耳鼻科臨床医の許を訪れるとすぐ、これは自らの手には到底負えぬから「〇〇病院、〇〇大学病院の〇〇先生の許へすぐ行きなさい」といわれてほとんど大した処置も受けずに紹介されて来ている。

私はむしろ救急病院の外科などで粗雑な創傷処理や縫合をうけるよりは鼻腔内の損傷程度を診断し然るべき処置を受けてから耳鼻科医の手によって線密な創傷処理と繊細な縫合処置を

受けた方が余程その予後、すなわち術後に残る瘢痕拘縮や支持組織の変形が少なくすむのではないかと思っている。

一般に顔面外傷でまず目につく症状は鼻出血、呼吸困難、口からの出血、顔面軟部組織の腫脹、あるいは支持組織の位置の異常による顔面の変形である。受傷直後であれば顔面軟部組織の腫脹は左程目立たなく、外鼻錐体の形態異常も直ちに診断でき、鼻出血に対する処置は耳鼻科医にとって日常行なっている操作であるがゆえに鼻鏡で鼻腔内の所見をみれば出血部位の確認は容易である。

若し顔面外傷患者を耳鼻科医が最初に診察したら自らの手によって修復処置を施すか、あるいは大きな損傷を伴っていて全身麻酔の下に他の科の医師の協力を必要とする場合でも必要な処置は施してから紹介するだけの知識と積極的な診療態度を今後更に一層持つべきことが大切だと私は考えている。

比較的軽度の顔面外傷例において耳鼻科医であれば誰れでも当然初期治療を行なう事ができるはずである。このような場合に用いられる簡単な器具と操作について原則的なことを述べ、他の問題については後述の各分担演者の書かれた内容を御参照いただきたいと思います。

まずどの様な外科的処置においてもそれに適合した器械器具が必要である。鼻骨および上顎

Symposium on Facial Injury.

Yoichi Ogino.

* 聖マリアンナ医科大学形成外科学教室

骨前頭突起の骨折、鼻中隔骨折に対しては従来ランゲンベック剝離子が良く使用されて来たがWalsham 鉗子または Asche 型鉗子を用意しておくで骨片の移動の整復に便利である。

創の縫合に必要な鑷子は組織を確実に把握し、しかも組織に無用の損傷を与えぬようにするために耳鼻科用鑷子を用いるよりは Mc-Indoe 型形成鑷子は皮下組織、筋肉層の保持、粘膜弁の保持および皮膚の縫合に便利であり、また hook 型鑷子は皮膚および皮下組織の保持および縫合に適している。縫合糸は針付ナイロン糸の 5～0, 6～0 程度がよい。

剪刀も形成用尖鋭および彎剪刀および尖端がやや彎曲した鈍剪刀で長さ12—13cmのものが最も使い易い。弁状になった皮弁の保持、適合の度合を目測するのに hook (単, 双) が意外に利用度が大きい。

また持針器は従来耳鼻科でよく用いられて来た Mathieu 型のものよりも種々の大きさの Hegar 型の持針器の方が針付ナイロン糸による縫合操作に適している。

どのような手術器械を用いても立派な手術結

果が得られればそれで十分であるという方があるかも知れないが、手術部位により、また創の処理の目的に応じ、最も使い易く、無駄な時間を費すことなく処置ができるものを用うべきであろう。確実な創傷処理を行ってから十分な止血処置、創の固定を目的として形成外科では術後の圧迫固定に重点がおかれる。顔面のように繃帯が思うようにできぬ部位では消毒した 3M テープを創の方向に交るように何枚も貼布しておく。

外傷の際の治療では一般的に外観的な形態の修復に重点がおかれがちであるが、外鼻と直接関連ある鼻腔および副鼻腔、咽頭腔などにおよぼす機能的な障害を無視してはならない。また感染の予防、粘膜の腫脹による呼吸、食物の摂取などの障害にも考慮を払い患者の全身管理も忘れてはならないのが外傷治療の要点であろう。

原稿到着：昭和49年11月29日

別刷請求先：荻野 洋一

〒213 神奈川県川崎市高津区菅生2095

聖マリアンナ医科大学形成外科学教室